

## 西洋のダンス音楽に関して

愛知県プロ・ダンス・インストラクター協会・総務  
ナイトウダンススクール 内藤和己

### 山中先生の講習会と、石場先生の音楽に関する講演会の覚え書き

このダンス会報が発行される時期からすると、随分以前の事になるのですが、過日＝今年の春の5月24日【日】に、僕は午前中に、愛知県プロ・ダンス・インストラクター協会・女子部の勉強会やまなかで、山中憲一先生けんいち（元全日本選手権大会ファイナリスト）のスタンダードの講習会、そして、1時間自動車を飛ばして、名古屋市天白区にある、平針公民館てんぱくに行き、社交ダンス音楽製作などのエキ

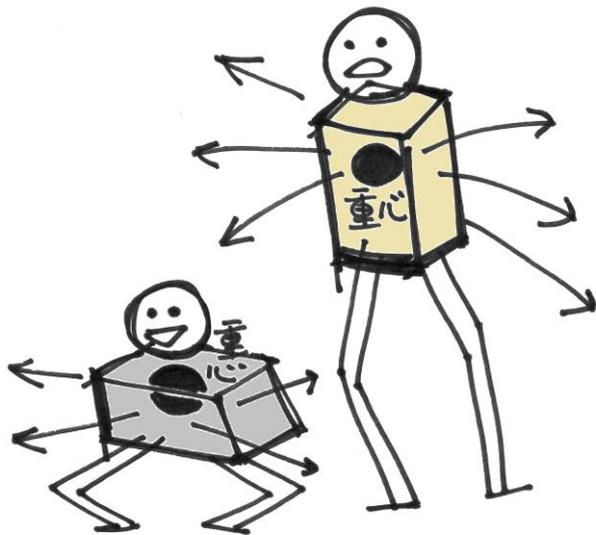


スパートでいらっしやる石場惇史先生いしばあつしの音楽講座を聴いて来ました。おふたりの講演のお話しでは、ダンスにおいて非常に重要な、そして私達ダンスのプロフェッショナルにこそ、ぜひとも聞いて頂きたい、共有したい重要な内容が沢山ありましたので、筆下手な僕が書くのも何ですが、とにかく皆様にお伝えしたいという一心から、簡単に記し、皆様に伝達したいと思います。

山中先生はいつもおっしゃるのですが、西洋人のバランスという感覚は、日本人（東洋人）のバランスという感覚と、多分に異なるだろうという事で、ダンスの際にも、日本人がバランスと言うと、どうも臍下丹田せいかたんでん辺り、つまりお臍へその奥深くの部分で、特に柔道や日本武道の際に、この臍下丹田に力を入れて、身体を安定させたり、又、臍下丹田に気合を宿すという様に、意識して用いられます。ところが西洋人のバランスというのは、もっと30cmくらい上の、簡単に言えば、両胸の中心あたりにあるという事です。（これは色々な先生方が色々な事をおっしゃっていて、“バランスの中心”というのは意識の持ち方であって、高くも低くもできるとか、重心は物理的に定義される概念なので、西洋東洋を問わずに同一の場所にあるとか、またそれすら、西洋人は上に、東洋人は下にあるとか諸説紛々です。つまり重心自体の位置は、物理的に、臍下丹田の様に下半身あたりにあり、これは日本人であろうと西洋人であろうと、人間という物体と思えば、同じで、西洋人は、“動きの中心”として、今解説している様な、両胸の真ん中あたりを“中心”に動いているとも言える訳です。）

日本人はどうしても、踊る時に、まず安定してバランスよく立つというと、両足をしっかり踏み締めてなるべく“重心を低く”して（＝臍下丹田辺りに重心を置こうとして）立ちます。お相撲の関取さんが、四肢しこを踏む様に、武道などで相手に足払いをかけられても倒れない様に、なるべく重心を低くするのは、当然の事と言えます。しかしダンスにおいては、例えばマーカス・ヒルトン先生（英国の至宝の世界チャンピオンで、英国のMBE保持者）も仰おっしゃっている様に、上（頭部）から吊り下げられている様に（つまり、例えば、タコやイカの頭を持って上から吊るせば、手足がだらんとぶら下がる様に）立ちなさいと教えて下さいます。この様にし

て立ち、そしてステップで移動したい場所に、上半身を持って行けば、どんどんスウィングして踊れるというもので、これはしっかり理解できる気がします。非常に大元の概念で、よく言われる事は、後半の石場先生の解説の中でもお話ししますが、日本人は“農耕民族”なので、ひとつの場所（土地）にドッシリ根を下ろして生活するのが基本ですから、その結果、民族的特性（指向性）として、一ヶ所に根付く事が特徴です。そのため重心を低く低く保ち、一ヶ所に安定して存在する事になり、逆に、“狩猟民族”であるヨーロッパ人（西洋人）は、いつも狩りをして獲物を追いかけているので、常時動く事が民族的特性になっており、そのためには、重心を低くすると、獲物を見つけた時に瞬時に移動できないので、身体の重心を胸とかそれ以上の高さに保っていると言われております。もっと判りやすく言えば、お相撲や柔道などでは、相手から押したり引いたり、突き飛ばされたり、又は足払いをかけられても、どっしりと立っていられるように、相手からの攻撃の影響を受けない様に、



に、重心を低く低く保ちたいものですが、テニスや野球、クリケットなどの様に、どこにボールが飛んでくるか判らないスポーツでは、重心を低くしてどっしり構え過ぎると、ボールが飛んで行った方向に、瞬時に反応して動きません。言い換えると、重心を低くしているのではなくて、むしろ高く“不安定”にしていた方が、よろめくように?!して、すぐに身体を行きたい方向に（重心を倒す事によって）行けるといいう感じがするでしょう。

しかし当然ですが、私達が指導する一般の生徒さんとしては、やはり重心と言うか、動きの中心が非常に低く降りて、安定している事をまずはレッスンしなければなりません。私達が『歩く』という事は、脚を腿からしっかり振り出して、腰部も同時進行で進み、そして着地した足が、直ちにその腰部（より上の重量や上半身）を受け止めていくというシステムですので、ダンスに於いても全くこのシステムを正確に再現すれば良いだけです。たまにメダルテスト

重心が低ければ、安定して良いのですが、地べたに這いつくばっている様なモノなので、俊敏に動きづらい。重心が高いと、低いよりは不安定だが、その分色々な方向へ動く可能性が開ける。生徒さんはまずは重心を低くする事を、トップ競技選手は、重心を高くして、重心を自由に“振る”“操る”事を学ぶと良いのでは？ また例えば、重心の低いのは、スポーツで言えば、相撲や柔道に向き、重心の高いのは、野球やテニスに向くとも言えるでしょう。

などで、ローア<sup>ひざ</sup>するとか、膝を十分使おうとする意識からだと思うのですが、常時膝を曲げっ放しで、しゃがむ様に踊る生徒さんを見かけますが、かなり雄大に踊る様な場合でも、まずは、歩く時のクッションくらいの膝の曲げ方か、それよりチョイ深く曲げる感じで十分ですから、

こういう生徒さんは、非常に奇異に映ります。しかし、これが上級競技選手ともなりますと、ただ単に歩いている様なシステムでは、やはり限界があるので、もっと“重心を自分から意識して投げ出す”感じで踊らないと、やはりスピードというか強いスウィングを生じさせる事ができません。複雑な例えで、逆に判りにくくなるかもしれませんが、例えば歩いている、次にややスピードアップしてジョギングやランニングに移行すれば、当然歩いているシステムではなくて、もっと“飛び移る”様な感覚で移動しますね。なので、上級の強い競技的ダンスとしては、この様に歩く事がランニングに変わる様な、運動システムの変更を作らないといけません。(実際にランニングしたのでは、足が縮み、飛んでしまうので、外見は歩くのが速くなった様な感じに見えている訳です。)大雑把に言えば、歩いている事とほとんど変わりはないのですが、精密に言えば、重心をもっと上に持って来て(いわば不安定にさせる訳です)そして、脚の振り出すスピードと腰部の移動する速度を、普通に歩いている時と、デザインを変えて自分で決めるのです。ちょっとややこしい書き方をしてしまっただけですが、言いたい事は、基本的には、普通のダンスをする分には、重心は低く安定すれば十分なのですが、上級を研究するならば、例えば山中先生がおっしゃるように、両胸の間くらいに、重心というか動きの中心を意識し、そこにバランスを保持する感覚も重要だという事です。

さて以下には、石場<sup>いしばあつし</sup>惇史先生の講習会から、ぜひとも皆様にお伝えしたい部分を解説します。本当は全部吐き出したい?!ところですが、紙数が限られていますので、最重要部分のみにいたします。こういう知識を皆様が共有して、ダンス音楽に関して、色々考えたり、更に学ぶきっかけになれば、非常に嬉しい事です。

石場先生は若い頃からチェロをされて、クラシック音楽に携わって、そしてオーケストラにも所属され、その中でこれから書くような英国人の音楽感性と、日本人の音楽の捉え方の民族的、生活経験などに起因する微妙な相違に、早くから気付いておられたの事です。その後私達の社交ダンス界とも深い接点を持たれ、近年では、ダンスパーティでのバンド演奏、音響の手伝いや、プロのセグエの音楽製作、社交ダンス音楽 CD 製作、ショーの構成、著作権の問題解決など、社交ダンス音楽のほぼ全般に深く関わってこられた、云わばダンス界の強い助っ人的存在の大先生です。

(先生は 1988 年からダンス音楽にかかわって、皆様もご存知の『舞サウンド』などの CD を発行され、JASRAC(=ジャスラック…社団法人日本音楽著作権協会)から独立した著作権をご自分で保有していらっしゃいます。)石場先生は、お金があればヨーロッパに留学しようとしたのですが、クラシックは結構お金がかかるので、それならば自分が事務所を設立して、クラシックの先生や演奏家を呼べばいいと思いい、実際、ベルリン弦楽四重奏団なども招聘されたそうで、講演にも随行し、ご自分もその中でチェロを弾かれたのですが、その頃から、『どうも日本人のやっている西洋音楽は、西洋人の本物と根本的に違っている』という感覚を一層強くされたそうです。それでその後自分でバレエ団やオーケストラを組織され非常に勉強された

そうです。ラテン音楽にもめぐり合い、見砂<sup>みさごただあき</sup>直照と東京キューバン・ボーイズや<sup>ありまとおる</sup>有馬 徹とノーチェ・クバーナとも親交があり、現在東京センセーションというバンドを組織されていらっしゃるそうです。このバンドは、今は亡き、私達愛知県<sup>°</sup>

ロ・ダンス・インストラクター協会の大先輩である、澤田山治先生も名古屋に招聘したという事ですから、ムーン・リバーなどで、ダンス音楽を演奏されたのでしょうか？

さて、石場先生がおっしゃるには、『社交ダンス音楽』というジャンルは無いとの事です。では私達の聞いているダンス音楽（のCD）は何なのかと言え、それは、色々な有名な映画音楽や、クラシックなど多くの分野の曲や音楽を、社交ダンスが踊れる速度やテンポに無理やりアレンジしたモノで、そのために例えば、（私達プロでもあまり知らないと思いますが）『間奏』などが強制的に省かれているのです。これはどういう事かという、例えばCDやレコードのジャケットに、例えばルンバの速度やテンポが、(27 4+64 など)書かれています、この中の4+64というのは前奏が4小節で、本編（本奏？）が2コーラスで、1コーラス分の32小節が2回繰り返されて合計64小節になるという意味です。しかし、普通の音楽であれば、実際は、2コーラスある真ん中に、『間奏』が入るはずなのですが、ダンス音楽では、感想を入れると、そこだけ静かになったり、休憩の様に弱い音楽になるので、その部分のみ振り付けを変えたりしないと、なんだか落ち着かない感じになるらしいことが想像できるでしょう。特にデモであれば、その部分は落ち着いた静かな振り付けをわざわざアレンジしなくてははいけませんし、競技会であれば、その部分だけ何かドヨ〜と沈んでしまいます。なので通常ダンス用の音楽では、間奏を無理やり潰して、コーラスをそのまま繋いでいるという事です。この様な構成になっているとは、僕も全然知りませんでした。

社交ダンス音楽というジャンルは存在せずに、結局は他の分野の多くの音楽を借りて使っているのだという事は、確かに他の観点から見れば、多くの他の分野の音楽でも踊れるので、非常に便利とも言えます。（しかしでは、他の音楽でも全然問題なく踊れるので、今や日本中でバンバンに流行して踊られているかという、そういう状況は無く悲観的…）しかしそういう経過の中で、『社交ダンス音楽』という地位を構築されずに長い年月が経過してしまっている、そこら辺を将来的には、もっときちんと考えていけば、社交ダンスの地位も上がるのではないかとおっしゃっています。

さて、次ですが、社交ダンスはやはり英国人の作り上げたモノなので、当然西洋音楽が土台になっています。では西洋音楽とは何でしょうか？（かなり東洋音楽≡我々の土壌とは異なっているとのことで）、やはり同じ音声という事で、判りやすいたとえ話としては、私達の英語の発音の習得や学習に構造が似ています。よく言われる事ですが、水という単語は、ネイティブ（現地人）が発音すると、ワラ〜などと聞こえますが、日本人がそれを理解するのは、英単語でそのまま、ワラ⇒水と瞬時に理解するのではなくて、『今、ワラ〜と聴こえたが、これはどういう単語？あ、そうか、ワラ〜というネイティブ発音は、ワラ〜、ワ〜ラ〜、ワ〜タ〜、ウォ〜タ〜で水だったな！』などという考察経緯を経て、結局一種の『暗号解説』の様な状態で理解している訳です。もっと言えば、僕もいつも英語ペラペラになれる様に勉強しているのですが、先生はとにかく、英語で何か聴いたら、日本語訳を経ずに、そのまま英語で考えられる“英語脳”にしなさいと指導するのですが、多くの日本人はたとえ、言われている英語が理解できても、それはその都度、判別できる英単語を日本語に置き換えて、日本語として脳ミソが理解している、つまり先にも

書いた様に『暗号解読』をしているのに他ならない訳です。さて、この様に書いて来ると、英語のエッセーを書いているらっしゃる「燕のジョー」氏の文章かと思われそうですが、そうではありません。

今何を主張しているかという、石場先生がおっしゃるには、実は西洋音楽もこれと同様で、私達日本人は、一旦、日本音楽に置き換えて聴いているというのです。ちょっと僕が補足説明しますと、確かに音楽ならば、別に英語の文章を聴く訳ではないので、意味もへったくれも無しに、聴こえるままに、その音や旋律を聞いているんじゃないのか？と思えるのですが、初歩ではそれでも良いのですが、例えば競技選手のトップクラスともなれば、これは多くの外人コーチや日本の先生からもそういう話を耳にしましたが、やはりそこら辺の理解がないと、インターナショナルな、又は国際的な選手権大会などでは好成績は取得できないとの事です。多少次元が異なる私事で恐縮ですが、僕が中部選手権でアマチュア・ラテン準優勝をし、ターンプロする時期に、ロンドンでダンスの勉強から帰って来る度に、僕のラ

<sup>ふるたはじめ</sup>テンの師匠の古田一先生はいつも、『内藤君、演歌を聴いたらいかんぜ。せつかくの英国の音楽耳がダメになるよ。』と厳しく、冗談半分に、しつこく言われました。それも一種こういう事だったのだな～とっていますが、今現在僕は、演歌を聴かないどころか、大好きで、しかもカラオケで演歌を歌いまくる始末なので、これで大成しなかったのだと、古田先生にあらためて、申し訳ない気持ちで一杯です。では実際具体的にどのような事をいうのかと言うと、それは多くありますが、例えば、オンビート・オフビートの事もそうです。紙数が限られていますので、あまり多くは語れませんが、例えば上級のひとつの理解としては、ワルツであれば、ナチュラル・ターンの第1歩、男性右足前進は、音楽の第1ビートが演奏される瞬間の1で、まず右足と左足の間に体重を置きます。(いきなりドカッと踏みつけて乗らない)そして、その第1拍目の後半(1&の&。第1拍目を8分音符2個に分けるならば、そのふたつめの8分音符)で、初めて全体重を右足に乗せるという訳です。これはあくまで一つの理解で、必ずしもこうとは限りませんが、好例です。日本人は単純明快すぎるのか、根性が入り過ぎるのか、<sup>かぶき</sup>歌舞伎調なのか、例えば一生懸命踊ろうとすればするほど、強く踏んで雄大に表現しようとするのか、この第1ビート目の瞬間に、足を全部使い切ろうとばかりに、ドカッと踏みつけます。これによって逆に連続的な動き(以下述べる様に、民族的特性から、西洋音楽とか西洋のダンスは、連続した動きを作る事が最重要)を断ち切ってしまう、不連続でドスドスしたムーブメントになってしまうのです。日本では、どちらかと言えば、瞬間瞬間が大切なので、とにかく一歩一歩を明確にクリアーに踏んで、それを繋いで、スムー

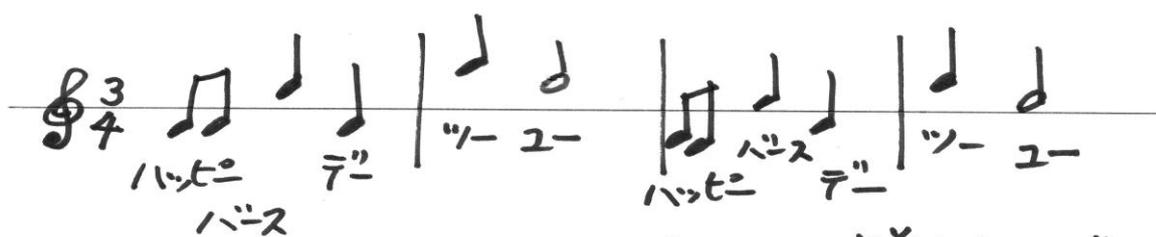


図1.

—見これぞ“ハッチリの本業だけ”...

ズに動こうとはするのですが、踏む瞬間が強過ぎ、ある意味、安定し過ぎて、結果的に、ガタついた軌跡になる傾向がある様です。

又別の一例として、例えば皆様は、『ハッピー・バースデー』が何拍子か、お分かりですか？というように石場先生は語られました。大体、ダンス音楽では3拍子の曲を4拍子に編曲する（例えば『フロム・ロシア・ウィズ・ラブ（ロシアより愛をこめて…007・ジェームズ・ボンドの映画音楽です。）』などは、ワルツの曲としても、スロー フォックストロットの曲としても編曲されています）し、ハッピー・バースデーの曲も、サルサのダンス界では“バースデー・サルサ”と言って、4拍子の曲で演奏され、そしてパーティ参加者でその月の誕生日の人を、主催者やゲストが踊って祝うという慣習がありますから、それならば、4拍子なのではと思われる方も存在するとは思いますが、原曲は、少し口ずさんでみれば簡単に判ると思うのですが、もちろん3拍子です。では、図1.の通りじゃんと思われるでしょうが、実際は違うのです。正解は図2.の如しです。

図2. 実はこれが正解で、何と第3拍目から始まっている!! とっしえ〜

3拍子は合っているのですが、実際はこういう風に、想像を絶する様な異なる状況になるのです。これはひとつには、この歌詞の中で、大切な単語は（もちろん全部大切と言え、全部大切なのですが、その中でも特に）『バースデー』と『ユー』なのです。なぜかって、当然バースデーを明確に発音しないと、今現在これは何の歌？何について歌っているか不明ですし、そして、次に重要なのは、“誰の誕生日？”を祝っているかという事ですから、その答えに該当する『ユー』が大事なのです。

それでここがとても重要な事柄なのですが、西洋音楽においては、そういう重要な単語を、第1拍目（強勢の部分）に合致するように配置していくのです。（一種の“倒置法”とも言えましょう。）もし、実際にハッピー・バースデーの楽譜を見たいという方がおられましたら、<http://jp.everyonepiano.com> を検索されると楽譜にたどつ

辿り着けますので、ぜひともご活用下さいませ。さて、よく言われる事ですが、アジアの言語とか日本語は、もっと平坦（発音的にも平坦）なので、もし日本語の歌であれば、通常こうではなくて、やはり、文章や言葉の初めから、淡々と3拍子の第1ビート目から、歌詞を配置する事になります。なので、（以前学校で実は習っていたとかの予備知識無し）皆様の多くは、図1.

の様な 3 拍子と思われても無理はありません。ちなみに、図 2. ではハッピー～という歌い出しの単語は、第 1 拍目には一致せずに、第 3 拍目からの歌い出しになりますが、こういう状況を、音楽的用語で『弱起(じゃっき=アウフタクト Auftakt)』と言います。僕は、カラオケでも同行者の皆がダンスを踊れるようにと、ワルツの『ファッション』、『テネシーワルツ』、ブルースで先述の『フロム・ロシア・ウィズ・ラブ』(“ロシアから愛をこめて”⇒これは 007 ジェームズ・ボンドの映画のテーマ曲です。)を英語で歌うのですが、この様に重要な単語を、ポンポンと強勢の拍に配置するという事がよく判ります。これらの曲は、普通のカラオケ店の DAM (ダム) というカラオケの機械にバンバンに入っておりますから、皆様も一度ご経験下さい。別の例も書いておきますが、石場先生が引用されるには、実は、有名なベートーベンの『運命』もこの弱起=アウフタクトなのです。子供達でも運命を喜んで、ジャジャジャジャ～～ンなどと大声で言いますが、実は精密には、そうではなくて、ンジャジャジャジャ～～ンと言うように、最初の音は、無音なのです。

この様に弱<sup>じゃっき</sup>起はすごくたくさんあるのです。さて、それではその背景にある、大げさに言えば、西洋と東洋(日本)の民族的相違とは何かについても、石場先生の解説をお話ししたいと思います。たとえば、TVなどで、相当日本語が達者な外人でも、『私が思うには…』などと話す場合に、『**わた**しが**おも**うには…』という様に非常に高低と強弱が強い、如何にも外人とすぐにばれてしまう様な発音になります。こういう事を見ると、やはり私達日本人の発話がいかに“平坦”で、淡々として、強弱に乏しいものであるかが判ります。よく言われる事なのですが、西洋は、狩りをする狩猟民族ですから、やはり獲物を追いかけたり、逆に獲物に逆襲されない様に、いつも『移動』するという事が、動作の原点なのです。これに対して、日本民族は、弥生(それか縄文)時代からでしょうか? 農耕が原点なので、狩猟民族の様に、あちこち渡り歩くのではなくて、一ヶ所にドッシリ根を降ろして、種をまいたり、収穫したりの、『定位置に存在する』という事が大元なのです。なので、例えば興味深い事実として、以下の様な事もあると、石場先生がお話ししたので、ご紹介します。

それは、日本人と西洋人の、音楽の速度の認識に関する事なのですが、例えば速い速度(クイックステップの 4 拍子など)に関してですが、日本人の場合は速いという事を、“拍と拍の間が短い”と認識するのに対して、西洋人は“音符が速く移動する。”と認識するというのです。もちろんどちらも同じ内容を表現を変えて表わしているだけで、同一の事を認識しているのですが、狩猟民族の西洋人は、いわば音と一緒に動こうとして速さを感じ、ドッシリ根を降ろしている農耕民族の日本人は、音を外側から客観的に眺めて、その間隔が狭いと見ているのでしょうか。こう言う細かい生活原理や長い民族的経験則に起因する様な差が、もちろん音楽以外の多方面に亘って存在する訳で、音楽ひとつに関しても、かなりの差異があり、西洋生まれの社交ダンスを、根底から深く理解しようと希望するならば、その大元の、音楽の認識の仕方、はたまた山中先生<sup>おっしゃ</sup>仰るような、重心(動きの中心)の持ち方の認識などに関しても、西洋人の認識や方式がどの様になっているかを考察せねばいけないという訳です。音楽自体に関しても石場先生が仰るには、西洋の“家”というのは、石造り(例えばロンドンなどではレンガ建築が古来からの建築法)なので、



音がすごく響くから、“和音”が発達して、色々な音が同時にいかに調和して演奏されるかが重要なのですが、東洋の場合、家は木で作るので、音は吸収されてしまい、西洋の様には“反響”しません。なので、伝統芸能の音楽である『能』などでは、音は、時間をずらして演奏され、それで侘びとか寂が楽しめるという事らしいのです。つまり西洋音楽では、一緒に多くの音の響きを楽しむ同時性が重要で、日本人にとっては、単音が発達して、ちょっとずれていた方が納得できるという事なのです。それに今でこ

そ日本の音楽も西洋化して、五線譜で書ける訳ですが、元々琴や能の音楽は、音も等間隔で表記できる訳ではないので、西洋音楽と色々な意味で根本的に異なるのです。地球上の音楽で、五線譜で書ける西洋音楽というのは、約4割くらいとの事です。

さて、ちょっと余談になりましたが、この様にダンス音楽においても、西洋耳、日本耳などという相違がある様です。あと、3拍子というのはやはり偶数でない“奇妙”な拍子として大昔には無かったのですが、馬の走り方から、ヒントを得て誕生したとか、色々私達ダンス人にとって有意義なお話がたくさんあるのですが、又機会を見て、教養講座などの講師として、石場先生を招聘したいと思っております。ところで、石場先生は、ここに表紙を掲載しておきますが、『社交ダンスはリズムで踊れ! (足型いらずのダンスレッスン)』という本を出していらっしゃいます。この中に、多少上記で解説した様な事や、更に、全世界の音楽の分類など、そして更に音楽の構造や、音響や音楽製作の仕組みなども、よく判る様に説明



会を見て、教養講座などの講師として、石場先生を招聘したいと思っております。ところで、石場先生は、ここに表紙を掲載しておきますが、『社交ダンスはリズムで踊れ! (足型いらずのダンスレッスン)』という本を出していらっしゃいます。この中に、多少上記で解説した様な事や、更に、全世界の音楽の分類など、そして更に音楽の構造や、音響や音楽製作の仕組みなども、よく判る様に説明

されていますので、非常に有意義です。総務で保持しておりますから、読みたい希望の先生は、内藤までご一報下されば、お貸し申し上げます。ところで、同じように、ダンス音楽を非常に判りやすく解説していらっしゃる、(そして前回の教養講座の講師でもあります) <sup>すずきとしお</sup>ペペ&カルメンの鈴木俊夫先生が出版されております『ダンス音楽の ABC (社交ダンスのための楽典)』も、非常にお勧めなので、その表紙も並べて掲載しておきます。